



名著『イングランドにおけるガーデニングの歴史』を読む 第4回

A History of Gardening in England



竹歳 誠

公益財団法人 都市緑化機構 評議員

第10章 ウィリアムとメアリー時代のガーデニング

ウィリアム [3世] とメアリー [2世] の共同統治の時代 [在位 1689 ~ 1702年] のイングランドに、どのくらいの数の庭園が存在していたかを知るのには、国中を馬で旅行したシーリア・ファインズの日記を見るとよいであろう。各地で庭園について彼女は書き留め、大庭園の最も特徴的な外見であったであろう噴水、あるいは「水を使った仕掛け」について事細かに多数書き残している。これらの水の仕掛けは、チューダー朝時代に導入されていたが、今や大いなる流行となっていた。ヴェルサイユなどフランスの噴水はあまりにも有名なが、巧妙な形とビックリさせる水の仕掛けはオランダの庭園に典型的なものであり、オレンジ公ウィリアムがほかのオランダの流行と一緒にこの国に持ち込んだものである。

庭園を周辺と調和させようとする試みは、壁が取り払われてしまう時代に至るまで、徐々に広がり、「風景」式 “landscape” style が古い形式に取って代わることになった。デザインの変化を研究するにあたって突然「庭園の壁を跳び越える」ということはなかったように思われる。風景式の始まりは、ゆっくりした変化や古い形式流派の衰退の中に見つけ出されなければならない。ウィリアム3世により持ち込まれたオランダ様式は一つの極端な様式で、トピアリー剪定はやり過ぎなくらいまで行われ、その結果自滅してしまったのである。

「結び目」の代わりに出てくる「パルテール」とは、ミラーの辞書には「敷地の水平分割。一般的には緑の芝生と花で飾る。パルテールには何種類もあり、普通のパルテールは芝生のおかげでイングランドでは一番美しく、控え目な上品さと素朴さが目を楽しませる」と説明されている。以下の2つはルイ・リージェが描いたものの事例（ロンドンとワイズが翻訳）である。

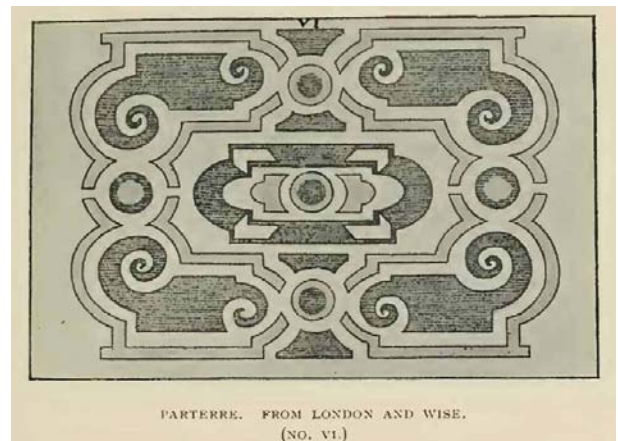


図1 パルテール(一部は切込み、一部はボーダー付きの緑の芝生の形)



図2 パルテール(芝生の切込みと真ん中に刺繍があり、外側には芝生のボーダーがある形)

ファインズは都会のガーデニングについても書いている。煤煙という大問題に対処しなくて済む前は、都会の庭園は田舎の庭園と同等以上の手間をかける必要はなく、多くのタウンハウスには見事な庭園が付属していた。公開狩猟地と庭園は、霧や煤煙、そして昼なお暗いというあらゆる不利な条件をものともせず近年さらに大幅に改良されたとは言え、それ自体は決して新しい発明とは言えない。ロンドンではその頃既に多くの古い庭園が消えつつあり、シティにあった大

きな庭園と貴族の館が取り壊されて街路や広場に作り変えられている。ハンプトンコート、キューのように庭園の中にはロンドンから離れたところにあるものもあった。個人所有の庭園のほか、狩猟地の存在がロンドン周辺の田園地帯に美しさを加えた。セントジェームズパーク、ハイドパーク、その向こうにはケンジントン宮殿があり、そこにもウィリアムが開始してアン女王〔在位 1702～14 年〕のもとで完成した立派な庭園があった。そこで雇われていた造園家はロンドンとワイズで、彼らはすぐ近くのプロンプトンに大規模な種苗園を持っていた。この種苗園はジェームズ 2 世の治世の時に始められ、当時一番優れたものであり、植物の膨大なコレクションを保有していた。彼らはケンジントンで国王のために仕事をしただけでなく、ハンプトンコートについても相当規模の改変を加えた。ブレナム庭園も彼らの偉大な業績であり、完成するまでに 3 年を要した。

当時、整形式のやり方で維持するには大きすぎる庭園を造る傾向にあり、その危険をサー・ウィリアム・テンプルは 1685 年に見抜いていた。また彼はフランスからブドウの新種を持ち込み、それを実に鷹揚に広く配ったが、それは「この種のことはすべて広く一般的になればなるほど良くなるもの」だからと書いている。

チェルシーの薬用庭園は 1673 年に創設され、1722 年、これを買ったサー・ハンス・スローンは薬剤師組合にこの土地を提供した。彼は長年にわたり庭園について並々ならぬ関心を寄せ続け、あの偉大なリンネが若い頃彼に会うために 1736 年イングランドにやって来た。

第 11 章 風景式庭園の夜明け

庭園のデザイン、そして植物の栽培、植栽に関してロンドンとワイズに追隨した庭師たちとしてはスティーブン・スウィツァー、その後にはブリッジマンがいた。アディソンとポーブが最初に古いスタイルを笑い物にし、「自然の模倣」を流行に持ち込もうとしたのはアン女王の時であったが、昔の庭園への反発と破壊は後に至るまで開始されることなく、彼らの理論が広がるには時間がかかった。

スウィツァーはロンドンとワイズの弟子であり、彼の書いた『田園の設計』*Ichnographia Rustica* のタイトルの意味するところは、田園邸宅の一般的デザインと配置を庭園、木立ち、狩猟地、放牧地などの中に取り入れるということである。

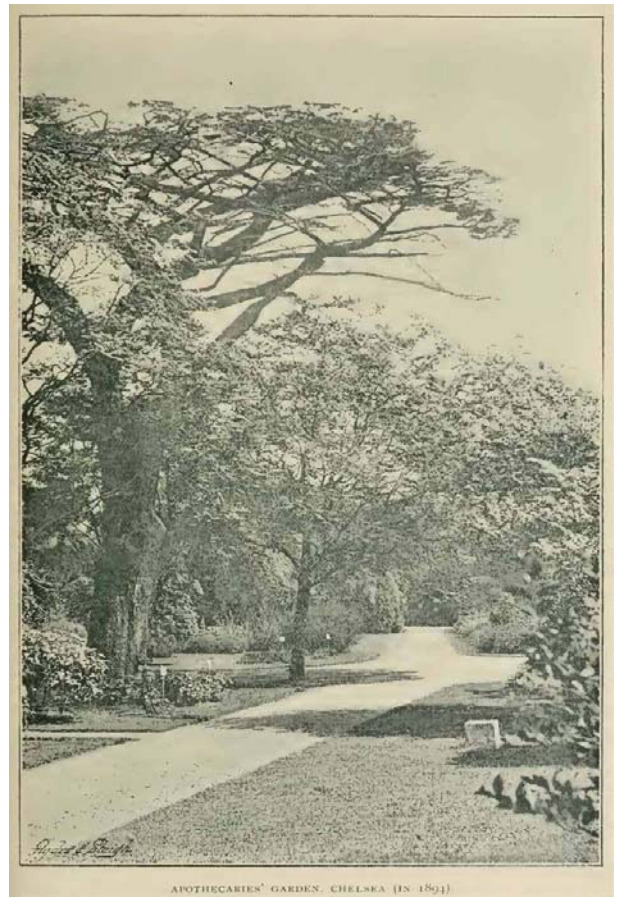


図3 薬剤師組合の庭園 チェルシー(1894年)

著者はこれを森林式ガーデニング、あるいは簡単に、田園式ガーデニング *Rural gardening* と呼んでいる。これこそ整形式庭園の終りの始まりであった。彼の仕事は「土地全体を美化すること」であると言っている。庭園というものが囲まれた土地である、ということには終止符が打たれ、既に狩猟地そして周辺の田園にまで食い込みつつあった。それはオランダ式の庭園が到達した不自然な様式や硬直性をいくばくかでも捨て去ることであった。

人々は「トピアリー」式に飽きつつあった。自然の美しさを知る人なら誰でも、野生のままに優美な形で育てている木を時には強く望んでいた。とは言え、もう一方の極端に走って、庭園の中に、いかなる直線もまったくないなどというようなことはありえない。

ブリッジマンは、物書きではなかったから、彼の考え方というもの、彼のした仕事を見なければわからない。彼は王立庭園の責任者としてロンドンとワイズの後継者であり、前任者たちより「はるかに高潔」であったとウォルポールは書いている。

風景式造園家 *landscape-gardeners* の何人かの名前



はバッキンガムシャー州のストウとの関連で知られており、それぞれの人物が代わるがわるこの場所に何かしらかのものを付け加えた。この流派の庭園デザイナーたちによって、庭園は完璧さの極致そのものと見られるようになった。

この庭園に美しさを増すことになったのは、庭園が壁で仕切られることなく、ハーハーで仕切られたので、美しい森の田園地帯を眺めることができるようになったからである。かくて庭園はハーハーにより狩猟地の中に溶け込みつつあった。これは庭園の範疇をはるかに越えており、ウォルポールによると「ケントが垣根を飛び越え、すべての自然が庭園であると見た」という時代に到達した。



図4 ストウのパラディオ様式の橋

花を愛する人々にとって、庭園と言えはそれはいつも庭園なのである。彼らの保護の下、園芸と植物学は着実に進歩を遂げ、それは庭園を狩猟地と一体化しようとする新しい熱狂にも負けなかった。科学者たちは植物の生殖に関する理論などを証明するために植物を使って実験をし、品種の改良や種類を増やすことに成功した。ガーデニングの実用的な分野で働いた数多くの人々の中で有名だったフェアチャイルドは庭園師協会 Society of Gardeners の会員であり、そのリーダー的役割を果たしていた。この協会の最も名高い会員であるフィリップ・ミラーは庭園師事典 Gardener's Dictionary の著者であり、本書は版を追うごとに科学としての植物学の進展の状況と外国の植物の数が膨大に増加していることがわかる。植物はアメリカから持ち込まれただけでなく、旧世界の他の地域からもやって来た。これに加え、国内の庭園師たちは交配実験や、二重咲き品種、特に斑入りの植物を創り出すことにより栽培植物の数を増やしていた。

温室と暖房温室の暖房、建築方法が改善したことで野菜

の促成栽培が可能となった。ブドウ、アプリコット、サクランボの促成栽培も試みられ、パイナップルも栽培された。スウェーデンの園芸家カルムが 1748 年イングランドで、市場向け菜園 market-gardens と早期栽培の野菜を見て衝撃を受けたと言われる。5 月になるとロンドン周辺では豆、エンドウ豆、キャベツ、ネギ、チャイブ、ダイコン、レタス（サラダ用）、アスパラガス、ほうれん草の野菜が大量に出回った。これらの野菜の大半はロンドン市内の道端で売りさばかれた。手押し車の行商人たちの呼び声 cries はロンドン生活の際立った風物であった。よく知られた呼び声の一部を引用すると次のような調子である。

ここに見事なローズマリー、セージ、そしてタイムがあるよ
来て買っておくれよ 僕のカキドオシ

...

どれもこれも見事なハーブさ 誰もがご存じの
みんな嫌がらないでおくれ この愉快的な愉快的な呼び声を
有名なロンドン街の呼び声を

第12章 風景式庭園

「堅苦しい規則的な庭園ほどショッキングなものがほかにあるのだろうか？」

何という革命であろうか、この言葉が浮き彫りにしたガーデニングに対する好みの変わりようは！ ところが、18 世紀後半に生きたすべての庭園デザイナーは、流行りのスタイルにあわせた新しい庭園を設計することに満足するだけでなく、先代たちの仕事を勝手きままに破壊し、完全に破壊できないところでは捻じ曲げてしまったのである。この庭園デザインの新たな展開のリーダーはケントであった。彼はブリッジマンの後継者で、そのうち整形式庭園から完全に訣別するに至り、代わりに風景式を作り出した。ウォルポールは、この革命への第一歩は隠し垣根 sunk fence を取り入れたことと考えた。確かに、そこにこそケントが示した基本的な思想があったのであり、壁や囲いが取り払われた途端、あらゆる自然や田園風景を庭園に取り込むことができるようになったのである。一般の人々はそれをハッ!ハッ! Ha! Ha's! と呼び、突然見えないところから散歩を止められることを発見してその驚きを表した。ケントは塀を跳び越え、そしてすべての自然が庭園であると悟った。

「自然は直線を嫌う」、これがケントの基本的な原則の一つであった。自然を模倣しようとするこの情熱は、ガーデニングの世界だけではなく、文学やファッションの世界でも見られた。極端に人工的なフランス趣味は長い間、ヨーロッパ文明の進展をリードしてきたが、今やその誇張された様式主義の足枷を振りほどこうとする動きが生まれた。しかしながら、自然美の愛好者たちは間もなく規則や理論により絶望的なまでに型にはめられてしまい、それはかつて整形形式を重視する流派と同様な状態になってしまった。これらの造園家たちはあらゆる人為を駆使して見る人に押し付け、その景観というものを真実の姿とはかけ離れたものへと作り変えているのである。中国式ガーデニングがこのデザイン流派に与えた影響を考えれば、これは何ら不思議なことではなかった。チェインバーズが設計したキューのバゴダはこの一時的に流行したよく知られた記念碑である。

風景式庭園との関係で最も高くそびえ立つ名前と言えばブラウンである。彼はどのような場所であっても、改良することを頼まれたり、新たに設計することを頼まれたりした時の口癖で、ここは「とても素晴らしい潜在的な可能性 capabilities」があると行ったので、「ケイパビリティ・ブラウン」Capability Brown という名前でも有名になった。もしブラウンが新しい風景や庭園を造ることだけに専念していたなら、後世の人たちは彼に対する恨みというものをあれ程までには抱くことはできなかったであろう。しかし実際は、彼の創り出した成果が称えられる前に、彼が一掃してしまった美しさを嘆く気持ちで一杯になってしまうので偏見なしに彼の仕事を見ることは困難であった。少数の人々があのパワー全開のブラウンに抵抗するだけの強い心を持っていたことに感謝の気持ちで一杯である。

ギルピンはブラウンのご都合主義的な手法についても疑問を呈している。ブラウン自身は線を引くことはできなかったし、芸術的な訓練や歴史的な関心、自然美を理解するに足るだけの教育も一切受けていなかったと言われている。したがって、彼が何回も見事に失敗したことは驚くに当たらない。

ブラウンはギルピンらによって激しく批判されたが、信奉者や模倣する者もたくさんいた。レプトンはブラウンの仕事の崇拝者であり、同じスタイルでデザインの仕事に取り組んだが、人々は今やブラウンの失敗というものに気がつき始め

ていたので、レプトンはブラウンがやったような全部一変させてしまうようなことはほとんどできなかった。ある場所をどう改善したらよいか助言を求められた時、レプトンは「レッドブック」と彼自身が呼ぶ本を用意しており、そこには、現在の庭園の計画と眺め、それとそれに対する提案が描かれていた。



図5 ウッドフォード NO.1 レプトンの図から
(キッチンガーデンが片方に広がり、もう一方には村がむき出しのまま見える)



図6 ウッドフォード NO.2 レプトンの同じ図から
(改善の提案:キッチンガーデンは取り除き、村は木を植えて隠す)

18世紀末までには風景式庭園はイングランドの国民スタイルと認識され、フランス、イタリア、ドイツの大陸諸国でも真似された。「イングリッシュガーデン」は流行となり、海外においても英国趣味を称賛し、他の国でも真似するよう勧める本が書かれた。しかしながら、大陸においては一点、緑の芝生が欠けていた。イングランド以外のどの国にも草地がこれほど美しく緑色のところはなく、風景式庭園師たちはこの偉大な長所に対し感謝した。



何人かの人々が、整形式庭園にもそれなりの美しさがあり、その様式のすべてを容赦なく破壊することの大いなる愚かさを指摘したので、破壊の進行は徐々に食い止められた。風景式で小さな邸宅の庭園を造ろうとする非合理性はラウンドンにより指摘された。フラワーガーデンが再び今まで以上に注目される地位を獲得し始めた。風景式は、その特徴を改善した上で今もなおファンがいて、また高い技術のデザイナーも有している。芸術家、造園家は、風景式というものは注意深く扱えば、この国と気候によく適した形で、館および創り出された情景が持つ最も心地よい効果と調和させることは可能であることを示した。

第13章 19世紀

過去100年間のガーデニングの発展は極めて著しく、かつ急速であった。植物学と分類方法の飛躍的な進歩、栽培方法の改良、膨大な数の温室とストーブ、世界各地から集められた無数の植物など、これらすべてのことが重なり合って19世紀の庭園を今ある姿にしている。今ほとんどどこでも見ることができる植物の数々は100年前にはわが国の海岸には到達していなかった。

風景式庭園に対する人気は頂点に達していた時、園芸の仕事に忙しく取り組んでいる現場の庭師たちが大勢いた。当時書かれた本には新しく持ち込まれたばかりの植物がたくさん含まれている。ガンジーユリ〔ネリネ〕Guernsey lily (*Nerine sarniensis*)の原種については、1659年頃日本から来た船が難破し、そこから岸に流れ着いた球根からガンジー島で育ったと言われた。ツバキ、別名「日本のバラ」(*Camellia japonica*)は18世紀半ばまでには栽培されていた。

ゼラニウムなど植物の科 families の中には特に注目を集めた結果、その植物に関する特別の文献が書かれるものまで出てきた。果樹園に関する文献も有能な書き手によって書かれた。トーマス・アンドルー・ナイトは果物、特にリンゴの改良者であり、彼のおかげで園芸協会 Horticultural Society が創設された。1811年、ナイトが第2代会長に選ばれると、協会の活動は大いに進展し、協会はその最大の仕事を始めることになる。それは海外から植物を受け取るだけでなく、収集家を派遣することであった。フジ *Wistaria sinensis* の最初の本は中国から1818年に送られてきた。おそらくすべての冒険的な収集家の中で最も成功した人物と言えばロバート・フォーチュンである。庭園の花として一番知ら

れているシュウメイギク *Anemone japonica*、ヤマブキ *Kerria japonica* などいくつかの花は彼のおかげによるものである。

15世紀の庭師が、もしほんの僅かでも見ることができたら多分最も驚くであろうと思われるのはランの温室であろう。この栄光に満ちた植物は何千も包まれてこの国へと送られ、場合によっては原生種の生育地を裸地にしてしまうこともあった。多くのラン科の植物が1830年までの間にこの国にやって来たが、それらの原生地やその生育環境についてはほとんどわからなかったため、その栽培というものは困難を極め、ランの栽培家は常に失敗に見舞われた。

ガーデニングのあらゆる分野で変化は急激になってきていた。現在花屋で見える様々な品種というものは今世紀の初頭には知られていなかった。展示会と功績表彰という仕組みが花卉栽培者のエネルギーを刺激し、新品種の生産を推進した大きな効果について疑う余地はない。

園芸の進歩について速足で振り返ってきた中で、キュー王室庭園の際立った位置づけについて十分に指摘されてこなかった。この庭園は1760年頃、ジョージ3世の母であるプリンセスオブウェールズにより創設されたものである。キューの重要性はウィリアム・エイトン以来、多数の有能な植物学者のもとで、ますます世界の植物関係の組織の中で第一等の地位を果たすことになった。

イングランドでは最も質素な家にも庭が造られてきたように思える。早くもチューダー朝時代には、農民は自分の小さな家(コテージ)の入口付近に何種類かの植物を育てようとした。最近では、見捨てられた昔ながらの植物をまた育てたいという気持ちから、コテージの庭にそれを探しに行く人がたくさん出てきている。コテージの住人によって今育てられている果物や野菜は、金持ちだが腕の劣る隣人にとってお手本となっていることも多い。町の中にあっても貧しい人が「自然の存在を知る手掛かり」として手元にちょっとした植物を置くことに努めているのである。

今世紀半ばまでは広く見られたイタリア風のデザインは、当時急拡大していた新しい花卉栽培者の花にふさわしいように容易に対応できた。「ベッディングアウト」bedding out [季節ごとの植え替え作業]として知られる流行が始まった。当初のそれは、できる限り大きな炎の色を生み出すために単に花壇を花で埋めることが本来のねらいであった。しかし、これによりどれだけ膨大な費用が掛ったか、またこのような状態で庭園

を維持していくことがいかに困難なことかも容易にわかる。現在では膨大な種類の耐寒性多年草植物が栽培されており、多くの耐寒性植物を、今我われの庭園に連れ戻したことは19世紀末の最大の改良である。

春の庭園は今や数本のチューリップとヒヤシンスが花壇で咲いている時代ではもはやなくなって、スイセンや多くの球根植物が土着化できて大量に植えられれば、夏の花が現れる前に鮮やかな効果をもたらすであろう。



図7 シリー諸島のスイセン

低木の植え込み、草で覆われた土手とか自然の中に植物を土着化させる考えは、19世紀後半の新しい出発点でもあった。これは「風景式庭園」と逆のやり方で、こちらはフラワーガーデンを周辺の田園の中にまで広げていくものである。自然式ガーデニングの技法を現場で実施するにあたって、自生種ではないが耐寒性があり自生する植物を土着化すると、「整形式庭園」を消してしまう必要はなくなる。マリアックによりフランスで育てられた新交配種のスイレンが庭園にとって最新の仲間の一つとなり、日本から輸入されたユリの数々は19世紀の庭園にとって一味違う別の性格を付け加えた。

庭園は家の付属物であると常に考えられたので、庭園は家と調和していなければならない。誰もイタリア風の館の正面にエリザベス朝の庭園を置きたいとは思わないであろう。とはいえ、何を選ぶかは建築、情景、気候ほか様々なことに左右されるから、様式に関して厳格で不動のルールは作ることはできない。



図8 自然式庭園のユリ

多くの美しい庭園がイングランド全体にわたり存在している。庭園の設計に関わった者なら誰でも、どの様式であろうとその実例を目にすることができる。インスピレーションを欠くなどということとはありえない。現代はガーデニングの発展の時代であり、もし庭園のデザインについて丹念に研究されるならば、また耐寒性の植物が適切に利用されたなら、19世紀の最新の庭園は、かつてイングランドで見られたどの庭園をも容易に凌駕するであろうと思われる。

■全訳版(仮訳)の公開について

『イングランドにおけるガーデニングの歴史』の全文について、その仮訳を都市緑化機構HPにて公開中です。なお、人物索引を添付しましたのであわせてご参照ください。

〈URL〉 <https://urbangreen.or.jp/gardeninginengland>

都市緑化技術 編集部

